

# 年度の重点目標・努力事項の展開と実践

－教科・領域・その他への位置づけと評価－

栃尾市立栃尾小学校教諭 野 沢 文 吾

## I 主題設定の理由

わたし達はこれまで年度毎に重点目標や努力事項を設定し、これを手がかりに学校教育目標達成のため努力を続けて来た。しかし年度末に至って実践のあとを評価反省（表1）する時、全職員でかなりの意気込みをもって設定しそれと取組んで来たにもかかわらず、児童の姿に余り変容が見られず、効果に見るべきもののなかったのが実情である。〈表1〉教育目標達成に対する職員の反省

- 1 学校教育目標の四つをその年度に達成しようと欲ばらず、児童の実態や急を要するものから順に取り上げ、重点的な扱いで年次計画的にその徹底を期していったら。
- 2 重点目標や努力事項の理解と達成のために、設定の根拠等をもっと深くただす必要はないか（学校の課題や教師の願い等から）
- 3 年度の重点目標について、学校学年学級という関連で一貫性に欠けていたのではないか
- 4 学校体制としてもっと力点をそこにおき、具体的な手だてを講じ徹底すべきでないか
- 5 年度当初や実践段階で、もっと全職員の討議の場を多くし、共通理解が必要だ。

また、県の学校教育実践上の努力点に照合して、わたし達のたどつて来たあとをふり返って考える時それらを展開する手順などに再考慮の必要を感じる。そして年間の見通しを立てるに当たつてこの解説のいつていることを素直に受け入れ、学校の立場や子ども達の実態等をふまえ年度の重点目標努力事項を系統的発展的に展開し、ひいては学校教育目標の達成に一步でも近づく必要のあることを感ずる。

次に研究グループで実施した県内60カ校（小・中・大規模校各20校）よりのアンケートの集計（表2）からも、本校で指摘されたと同じように、重点目標努力事項が設定されても、達成のための手だてが十分講じられていないということが、これらの調査対象校にも言い得るのではないだろうか。

〈表2〉

質 問	内 容	小 学 校				中 学 校				小中計
		小規模校	中規模校	大規模校	計	小規模校	中規模校	大規模校	計	
①努力事項が教科や領域に位置づけられていますか	位置づけられている	8	2	7	17	7	4	8	19	36
	位置づけられているが、その時々が必要なものを取り替える	3	3	0	6	2	2	1	5	11
	努力事項はあるが手が付けられない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
②努力事項は到達点が明示されていますか	明示してある	3	3	4	10	2	2	0	4	14
	特に明示してない	8	1	3	12	7	4	9	20	32
③目標達成度の評価の観点について	計量化する尺度がある	2	0	0	2	0	0	0	0	2
	計量化はできているが評価の観点未定している	4	3	5	12	2	2	1	5	17
	自由な観点でその時々やる	5	2	3	10	7	3	8	18	28
	そ の 他	0	0	0	0	0	1	0	1	1

以上本校での実態、本校の今までの進め方と実践上の努力点の示唆していることとの比較、県内抽出校の実態の三点から年度の重点目標達成のための展開や実践について述べて来たが、結局のところ実践の場である学級での毎日の指導と結びつくための具体的手だてに欠けた面があるのではないかと考えられる。従って具体的な実践と結びつく手だてとはどんなことなのか、どうすればよいのかを研究し、それらの問題点を解決していきたいと考え、この主題を設定した。

## Ⅱ 研究の方向とその手順

これまで述べて来たことがらについて、次の諸点に焦点をしほり研究や実践を進めることにした。

### (1) 全職員の共通理解を深める

何事に限らず言えることだが、全職員が何らかの形で討議し参加しそれを重ねていってこそ理解が深められ、そうすることによって構成員の意識が高められ、共通理解しながら進めることが目的達成のための原動力となる一番重要な要素であると思われるからである。

### (2) 実践の場への具体的展開と、実践を支える研修や環境の構成

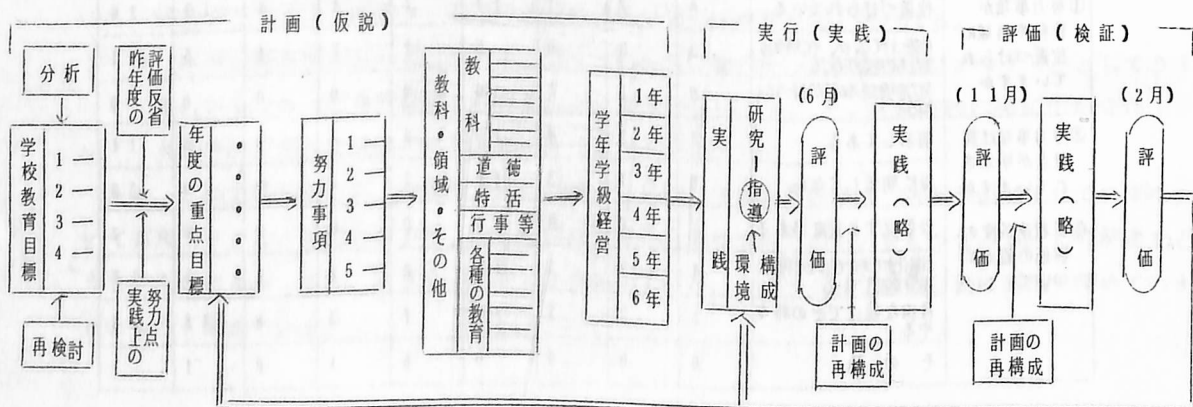
設定された重点目標を、教育課程の大綱その他実践の場に展開させ、具体的で実践し易いものにしていく等の手だてを講じていきたい。また実践を支えるであろう研修や実践の場で指導効果を高めるに必要と考えられる環境の整備ということも取り上げていきたい。

### (3) 評価の実施とそれによる指導の改善

物事はやりつばなしであつては効果が上がらないことは言うまでもない。ここでもこうしたことを考え、年度内に数回の評価を実施しそれによつて計画をねり直し、更に実践をくり返していきたい。

以上のことを考慮しこれからの手順としては、特に「学校運営の近代化」ということがさげばれ、その方策として「学校運営を循環過程(マネジメントサイクル)としてとらえていく必要がある」といわれていることでもあるので、この実践手順を科学的なM・Cとして考え、次の構造図のように進めていきたいと考えた。

表3



### Ⅲ 研究の内容

#### 1 年度の重点目標・努力事項の設定

学校教育目標が、その性格上普遍的で抽象的であり過ぎるため、その達成ということと日常の教育実践が結びつかずに遊離し、結果的にはスローガンで終わってしまい勝ちであることを頭に、しかも実践上の努力点の教えている具体的でしかも誰もがいつでも頭において指導できるものということで次のもの（表4）に落着いた。また重点化焦点化した重点目標も、これを達成していくためにはもつと小さな窓から眺めた、より具体的な努力事項を掲げて指導を積み重ねていくと共に、その窓から評価をし理想像に向かって一步一步近づかなければならない。本校児童の全般的傾向として、学習に取り組む姿勢が受身的であるといえる。これは裏がえしていえば指導者側にも問題があり、色々な角度から眺めると家庭や地域にも問題があると考えられるが、わたし達はこの努力事項を学級経営（学習指導・生活指導・その他）・教師の研修・環境構成等教育活動のあらゆる分野に展開し、年度の重点目標を達成する手がかりとしていきたいと考えた。

＜表4＞年度の重点目標・努力事項

年度の 重点目標	自主的・積極的な学習をさせる	努力事項
		1 疑問を持たせる 2 よく考えさせる 3 計画的にさせる 4 学習方法をわからせる 5 発表力を伸ばす

#### 2 年度の重点目標・努力事項の展開

##### (1) 教科・領域・各種の教育への展開

重点目標・努力事項が実践と結びつくようにする手がかりとするため、先ず重点目標努力事項の窓から見て指導場面にどんな問題行動が存在しているか、学年毎にさぐってみた（表5）。この問題点を資料とし、それらを解決するために教科・領域・各種の教育についての指導の重点を掲げた（表6）。

＜表5＞指導場面での問題点

第1学年

重点目標 努力事項 領域その他		自主的・積極的な学習をさせる				
教科	国語	(1) 疑問を持たせる	(2) よく考えさせる	(3) 計画的にさせる	(4) 学習方法をわからせる	(5) 発表力を伸ばす
		・ 何かが書いてあるかわからない ・ 相手の話を聞けない	・ 落着いて考えられない ・ 自分の考えをいえない	・ 読解力不足 ・ 漢字の意味がわからない ・ 伝言できない	・ 文字がわからない ・ ノートの使い方がわからない	・ 自分勝手に雑談的にしか言えない

〈表6〉

		指 導 の 重 点
教 科	国語	児童の発表力の向上をはかる
	社会	学習の目標やその意味をよく把握させ、基本的事項を積極的に身につけさせる
	算数	問題の解決過程において、筋道のたつた考え方ができる能力を育てる
	理科	自然に対する問題意識をもたせる
	音楽	美しい声で、楽しく歌えるようにする

## (2) 指導の重点・強調事項の学年化

つぎに前項で掲げた指導の重点を達成するため、各教科、道徳・特活・学行行事等・各種の教育・生活指導等全般にわたって具体的な強調事項を設定し、それらを1～6年まで発達段階に応じて学年化してみた。 〈表7〉 指導の重点・強調事項の学年化(例) 国語科

		内 容
1	本年度の指導の重点	児童の発表力の向上をはかる
2	本年度の強調事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発達段階に応じた話しことばの指導をする</li> <li>1 内容をよく考えながら読ませる</li> <li>2 人の話をよく聞いて、自分の考えと比較させる</li> <li>3 読解スキルの活用をはかる</li> <li>4 正しいノートの使用及び辞典の活用をはかる</li> <li>5 学年に応じた話しことばを使わせる</li> </ul>
3	強調事項の 学 年 化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 大きい声ではっきり話す</li> <li>1 ひろい読みでなく、文として読めるようにさせる</li> <li>2 さし絵をもとにして、何が書いてあるか考えさせる</li> <li>3 書いてあることがらの大体を理解させる</li> <li>4 ことばあつめをし、はっきりとノートに書かせる</li> <li>5 「ほくは(わたしは)……です」 「ほくは(わたしは)……します」</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正しいことばで、はっきり話す</li> </ul>

## (3) 学年学級での実践

今まで(1)、(2)で述べて来た事柄については、結局のところ学年や学級がその実践の場となる。そこで学校経営方針・学年経営案・学級経営案に夫々関連をもたせ、学年・学級の実態に即したもので、しかも全校的な統一された形で進められるよう留意しながら、次のように経営案を立案し実践している。(表8)

## 3 職員の研修



わたし達は重点目標・努力事項を設定し、それらの実践に努めている。この実践の裏づけとしてわたし達指導者が、日々研修を積み豊かで新鮮な活動力をたくわえて子ども達に立ち向かってこそ、指導効果が期待できるものと考えた。そこで研修も特に関連深いもの、問題解決の急がれるものといった観点で、次の二つを重点的に取り上げて実施している。この二つを実践している中で授業研究もやり、年度の重点目標を達成する原動力としようと考えたのである。

#### (1) 理 科 （問題意識を持たせる理科指導）

わたし達は昨年度問題意識を持たせる理科指導という主題を掲げ、特に指導過程を取り上げて研修を進めて来た。これは本年度の重点目標「自主的・積極的な学習をさせる」と特に関連深いと考えられ、しかも前年度未完成の部分も残っていることから、本年度も継続して取り上げ、特に強調して研修にあたりまた指導も強化していくことにしている。

#### (2) 交通指導（主体的な学習と年間指導計画の作成）

最近の交通事故多発に伴って、42年度より学校行事等の中で、月1時間の特設の交通指導の時間として指導を進めて来た。しかしこの3年間の指導を省りみると、教師の「こうしなさい」といった観念的な指導だけで効果が上がらず、努力事項の「疑問を持たせる」「よく考えさせる」……等から、子ども達を主体的に学習させていかなければならないということになった。そして月1時間の少ない指導時間に何をどう学習させるかといった、精選された年間指導計画の作成も急務であると考え、こうした作業も進めている。

〈表 8〉

第〇学年 学年（学級）経営計画
1 学年の実態
2 学年の指導方針
(1) 学校の重点目標と努力事項
・ 年度の重点目標
・ 努力事項
(2) 学年目標
(3) 学年の努力事項
(4) 学年経営の実践
○ 経営の重点と指導
ア 各教科の指導
イ 道徳の指導

### 4 教育環境の構成

わたし達の仕事（教育経営）は、直接的な領域としての教育活動と、間接的な領域としての教育条件の整備の二つに大きく分けられると言われており、また今まで述べて来た年度の重点目標達成のための実践は、職員研修と教育環境の整備という二つに裏づけられて初めて効果が上がるという論拠に立つて仕事を進めて来た。

そこで本校の施設設備を、本年度の重点目標達成のためにという観点から眺める時、多角的に、有機的に効果の上げ得るように整備され配置されている状態にあるかといわれると、必ずしもそうとはいえない。従って現存する施設設備の構成を重点として取り上げ、教師の創意工夫によって一層教育効果の上がる環境に整備していきたいと考え、年度末までに「環境整備3カ年計画」を作成しようということで今仕事を進めている。

## 5 評 価

学校経営の現代化のために、計画—実行—評価というサイクルによつて仕事を進めることが最近提唱されており、経営をより効果的に改善していくためには、経営を総合的客観的に評価して問題を発見し、それを解決していくことが必要であることはいうまでもない。本校では6月、11月、2月の3回にわたつて評価を実施することにしており、次のものは6月に実施した例である。

〈表9〉 45年度重点目標達成のための評価資料(6月) 1年3組 数間キヨ №1

領域	教科 指導 重点	内容	評 価 の 観 点 (強 調 事 項)	5段階評価 1 2 3 4 5 1 1 1 1 1	問 題 点		今後の手だて
					見られる傾向	関連する事柄	
教 科	国 語	児童の発表力の向上をはかる	・大きな声ではつきり話させる				
			1 ひろい読みでなく、文として読めるようにさせる	1 1 ⊕ 1 1	・ $\frac{1}{3}$ 程がまだ十分でない	・わかち書き、わかち読みがはつきりしない	・話しことばを訓練し、自分の考えを自由に発表させたい
			2 さし絵をもとにして、何が書いてあるか考えさせる	1 1 ⊕ 1 1	・さし絵と文の関連がうすい		
			3 書いてあることがらの大体を理解させる	1 ⊕ 1 1 1	・深い内容理解に至らない	・発音と文字表現が一致しない	
			4 ことば集めをし、大体を理解させる	1 1 ⊕ 1 1	・語いの修得不十分		
			5 「ぼくは(わたしは)………です」	1 ⊕ 1 1 1	・語尾がはつきりしない		

## IV むすび

これまで、昨年度の評価反省から出発し本校で実践して来た各種の試みについて述べてきたが、結論的にいって口でいう程生やさしい問題でなく、深く首を突つこむ程むずかしく、特に学校運営の基本にかかわる問題であるだけに非常に困難な仕事である。しかしこのような手順で進めてきたことによって職員研修に対する構えが変わって来ており、それ程著しい変化とはいえないにしても、最も重要と考えられる子ども達の姿にいくらかずつ変化や進歩のあとが認められるようになって来ており、むずかしい仕事ではあるがここに喜びを見出し、今後一層この仕事に力を入れて進めていきたいと思っている。

内容的には、今年度取り上げた重点目標の間口が広すぎたことから出来るだけ実践容易でしかも間口の狭いものを取り上げるべきだったということと、6月に実施した第1回の評価から、評価基準等についてももう少しはつきりしたものを持った上進めるべきだったと反省している。第2回目以後の評価に当たっては、これまでの反省の上に立ってこれらについて十分研究を重ね次の実践に役立てていきたい。また、今までのものを来年度以降の学校運営の足がかりとして役立てていきたいと考えるわけである。